

Title	フィリップ・ロットの世界：一九世紀アメリカ東部の農村社会
Sub Title	A rural community in Nineteenth-century America
Author	岡田, 泰男(Okada, Yasuo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1982
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.52, No.1 (1982. 6) ,p.1- 18
JaLC DOI	
Abstract	This is a community study of a particular kind, as the community is viewed from a perspective of a single individual, and its boundary is defined by his economic activity. The setting of this study is rural New York in the nineteenth century, and the leading man is Philip Lott, a local farmer. However, the attention in this study is focused not on the geographical area, but the group of people with whom Lott had business transactions in his daily life. The community in this paper is the world where he earned and spent his money, the world where he knew everybody and everyone knew him. Needless to say, his world was not static. Changing relationship within the locality and changing boundaries of relationship are traced, centering upon the economic activity of Philip Lott.
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19820600-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

フィリップ・ロットの世界

——一九世紀アメリカ東部の農村社会——

岡 田 泰 男

はしがき

フィリップ・ロット (Philip S. Lott) が勘定帖を付け始めたのは、一八三〇年一月一日、彼が二一才の時のことであった。その後、半世紀以上にわたって勘定帖を付け続けようとは、多分、彼自身も考えていなかったに違いない。入念に記入された勘定帖と元帖とは、ロットが住んでいた一九世紀アメリカ東部の農村社会を知るための、この上ない史料である。当時は西漸運動の最盛期であり、東部農村からは多数の人々がアメリカ西部へ移住した。故郷を離れフロンティアで開拓に従事した人々については、いろいろな研究があるが、ロットのように東部に留まっていた農民については案外知られていない。また、最近では都市史の研究が進んできたので、東部都市の住民はしばしば分析の対象となつていくが、農村社会は閑却されている。本稿の目的は、かかる空白を埋める素材を提供しつつ、アメリカ東部農村の姿を描くことである。もとより、勘定帖は日記などとは違い、貸方借方の記入が

フィリップ・ロットの世界

なされているのみであるから、フィリップ・ロットの世界を描くといつても、社会や文化よりは経済面が主になることは最初から断わっておきたい。しかし、国勢調査資料など他の史料も利用することによって、できる限り立体的な農村像を示すよう努めたいと思う。⁽¹⁾

さて、われわれの対象は農村社会であるから、この研究は地域社会もしくはコミュニティの歴史的研究たることを目指している。但し、これは通常の意味における地域史あるいは地方史ではない。というのも、本稿においては主人公ロットの住んでいた農村ではなく、彼が取引していた人々に焦点を合わせているからである。行政的又は地理的にまとまった区域を地域社会と看做すことは一種の便法であるが、住民のまとまりや意識を考慮すると簡単にはゆかなくなる。初期のアメリカ農村社会学は、住民の商取引範囲をコミュニティの境界設定に利用したが、ここではその考え方を借り受け、地理的空間よりも人間的つながりを重視する。すなわち、ロットの取引範囲もしくは経済活動圏内に含まれ

る人々を、彼にとってのコミュニティーと考え、勘定帖に氏名が記載された人々が、フィリップ・ロットの世界を構成すると考えることとした。⁽²⁾

ロットが住んでいた場所は、ニュー・ヨーク州のほぼ中央にあるセネカ郡ロダイ (Lodi, Seneca County) という村である。

実際には、彼の取引相手のほとんど全員がこの村の住民であったが、場所と人間とがどれくらい重なり合うかという点で、本稿における問題の一つでもあった。言葉をかえれば、当時の農民にとって、彼の住んでいる村がどれ程の意味を持っていたか。彼にとって「地域」社会は存在したか。その点を明らかにしたいと考えた。もちろん、ロダイの住民すべてが彼と取引関係を有したわけではないし、彼の取引相手が五〇年間替わらなかつた筈はない。まして、ロットが勘定帖を付け続けた半世紀は、西漸運動と共に、工業化、都市化の影響が農村を揺り動かした時代であった。したがって、ある地域の中での人々のつながりの変化と、人々を結ぶ輪の拡がりの変遷とを明らかにすることも本稿の課題である。

一九世紀アメリカ東部の農村は、すでに貨幣経済の世界ではあったが、個々の取引がその都度現金で決済されたのではない。日用品の購入にせよ、農産物の販売にせよ、農業労働者の雇用にせよ、掛け売り掛け買いが通常であった。もはや農民の生活は自給自足ではなかつたから、勘定帖を付けておくことは農場経営にとっても大切であつたらうし、取引相手別の元帖を記入しておくことも必要であつたに相違ない。いうまでもなく、ロットは現金取引の際にも記帳しているので、これらの記録は財貨・サービスの

生産者・消費者としての一農民の生活を余す所なく語ってくれる。勘定帖、元帖を通じて考察しようとするロットの世界は、彼が収入を得、それを支出した所であり、彼が日常生活を営んだ場であり、かつ彼の顔見知りの人々がつくり上げている世界である。すでに記した如く、実際の舞台はロダイという一農村にほぼ限られるが、この農村が自給自足の経済圏を形成していたわけではない。ロットが村の商店で購入する物資のほとんどは外部からもたらされたものであつたし、彼の生産した小麦やオート麦にしても村内で消費されたとは思われない。本稿の考察がロダイを中心とする理由は、われわれの主人公の直接的取引相手の大半が村の住民であつたこと、彼の活動範囲が地理的には狭かつたことによる。ロットがニュー・ヨーク州の外へ足をのびしたのは、一八七六年、合衆国建国百年記念博覧会をフィラデルフィアに見物にいった時のみであつた。とはいへ、本稿の目的は、農民の世界の狭さを示すことではない。むしろ、アメリカ東部の一寒村が、一人の農民にとって、いかなる拡がりを持った世界であつたかを明らかにしたいと思う。⁽³⁾

一

フィリップ・ロットの父、エライヤ・ロット (Elijah Lott) は、ニュー・ジャージー州から、セネカ郡へ移住してきた農民であつた。一九世紀初頭においては、ニュー・ヨーク州の中央から西は、まだ移住者を迎え入れる地域だったのであり、ロダイの村にもニュー・ジャージー州出身者がかなり存在した。セネカ郡の

北部には小さいながらもウォーターロー (Waterloo) や、女権宣言で名高いセネカ・フォールズ (Seneca Falls) といった都市があるが、ロダイのある南側は純農村であり、一九世紀半ばには穀作地域であった。

フィリップは父の農場で育った。勘定帖を付け始めた一八三〇年代、彼は父や隣人の農場を手伝うと共に、セネカ湖を運行する船でも働いたし、大工仕事も身につけた。一八三六年、エリザベス・デグロー (Elizabeth Degraw) と結婚し、二人の息子と一人の娘をもうけた。一八四一年には、ロダイの村の北西、父の農場の近くに、五九エーカーの農場を購入した。その後は農業に専念することになるが、四、五〇年代の年間の収入は約六〇〇ドル程度であった。五〇年代中葉には、農場購入の際の借金の支払も終り、経営拡大が可能になる。一八五〇年の国勢調査時点では、彼の農場は五九エーカー、四、五〇〇ドルと記録されているが、一八六〇年になると、一二〇エーカー、八、四〇〇ドルとなっている。好況の六〇年代、彼の農場からの年収は一、三〇〇ドル前後まで上昇したが、七〇年代に入るといく分活動のペースがゆるみ、年収も約九〇〇ドルとなった。一八八〇年以降、農場経営が次第に長男にまかされるようになって、勘定帖への記入もまばらになる。フィリップ・ロットは一八八八年、八〇才でこの世を去った。

ロットは、ロダイの村では、いわば中流農家であった。しかし、次男を州の首都オルバニー (Albany) にある医学校へ学ばせることができたし、娘も近くのオーヴイド・アカデミー (Ovid

Academy) へ進学している。南北戦争の時には、息子達が徴兵免除になるよう、七〇ドルずつの免除金を支払っているし、妻の死後、教会へ三〇〇ドルも寄付している。帖簿からは、個人的感情などは解らないが、彼は村での生活に満足していたように思われる。死ぬ時まで、「見晴らし農場」(Scenic View Farm) と名付けられた農場に、長男夫婦と娘と一緒に住み、次男は隣りのイエイツ郡 (Yates County) で開業していた。ロットの一家は明るく澄んだセネカ湖の光景に魅せられていたに違いない。⁽⁴⁾

さて、ロットの世界がどの程度の大きさであったか、彼が何人と取引していたかを見ておこう。一八三〇年から八〇年代半ばに至る約半世紀間に、ロットの勘定帖に登場した人数は四四七名である。村の商人、鍛冶屋、製粉業者、靴工、仕立屋、皮なめし屋、桶屋、脱穀業者、農業労働者、女中、近隣の農民などが、これに含まれている。ロットは、自分の兄弟に、そのの鈴を五〇セントで売ったとか、ジャック・ナイフを一二セントで買ったとかいうことも記入しているが、四四七名の中には家族の人数は含まれていない。但し、家族を考察の対象から除くわけではないのであって、彼等の持っていた経済的意義については、その都度触れる。なお、この四四七名というのは、あくまでもロットが経済的関係を結んだ取引相手の数であって、彼の知り合った人々の総数ではない。帖簿には、「民兵訓練での飲食」(一八三八年)とか、「農業共進会入場料」(一八五九年)とか、「教会寄付、懇親会費」(一八七八年)などという記入もあるから、そうした機会に社交的付き合いをした人で、右の人数に含まれぬ者も当然存在したことであ

ろう。また、ロットはさまざまの書物を読んでいた。『アメリカン・アグリカルチュラリスト』や『ジェネシー・ファーマー』などという農業雑誌は、かなり多くの農家がとっていた様子であるし『オルバニー・ウィークリー』や『ニューヨーク・トリビューン』の購読者も多かったかもしれない。しかし、ロットは『ニューヨークの歴史』（一八三九年）、『キリスト教哲学』（一八四〇年）、『ゴルドスミス博物学』（一八四一年）などを購入しているし、『南北戦争の歴史』『南軍の将軍』（一八六七年）といった本も読んでいた。彼の世界がセネカ郡の小さな村だけであったと考えるべきではないであろう。⁽⁵⁾

以下、年代順に考察を進めることとし、まず一八三〇年代を取り上げよう。彼は二〇代の青年であり、色々な可能性を探っていた。したがって、年をとってからよりも多様な経済活動に従事していたといえる。ここで、彼の取引相手を、いくつかのタイプに分類しよう。まず、ロットが供給もしくは販売する側（A）にいるか、需要もしくは購入する側（B）にいるかで区別する。次に、財貨・サービスを（1）農業労働、（2）非農業労働、（3）農産物、（4）非農業製品、（5）その他、に分ける。（5）のその他とは金銭貸借や内容不明の場合である。ロットが他の農民のために農作業をしたとすれば、その農民との関係は（A1）に、ロットが商人から工業製品を購入した場合には、その関係は（B4）に分類されることになる。

第一表は、一八三〇年代にロットと取引をした八一名を前記の方法で分類したものである。但し、特定の個人とロットとの取引

第1表 ロットの取引相手（1830年代）

取引のタイプ	人数
(A) ロットが下記を販売	
A1 農業労働	16
A2 非農業労働	13
A3 農産物	3
A4 非農業製品	1
A5 その他	5
(B) ロットが下記を購入	
B1 農産労働	14
B2 非農業労働	16
B3 農産物	1
B4 非農業製品	12
B5 その他	0
合計	81

関係は必ずしも一定でなかったもので、分類も絶対的なものではない。例えば、ロットはアーロン・ミラーに対し、農場の手伝いもしたし、大工として働きもした。ジョン・デモットは商人であったが、ロットは商品を買うと同時に農産物を買ったから、（A3）にも（B4）にも分類できる。このように、八一名中一四名は、複数のタイプに分類可能であったが、表においては、主たる機能、主な取引関係のみに注目して区分した。商人の場合、ロットによる農産物販売量が少なかった理由もあって、（B4）に含まれている。

この表から浮かび上がってくるのは、まだ自分の農場を持っていない農村の青年の生活である。ロットは近くの農家で、草刈り、乾し草作り、収穫、脱穀などを手伝い、薪を切り、豚を屠殺し、肥料を運び、畑を耕した。第一表にはロットの父親が入っていない

いが、三〇年代初頭には、父の農場での仕事が大半をしめた。例えば一八三三年、彼は年間二五六日を父の農場で働き、月八ドルを与えられている。賃金の一部分は現金であるが、他はシャツ、ズボン、靴下、靴などで与えられた。やがて他所で働くようになり、農家の手伝いのみならず、セネカ湖のアトランティック号に乗り組んで月に一二ドル稼いだ。一八三四年、デモットの店で大工道具一式を購入し、先ず父親のため小屋を建てた後、ユーカー・ハウエルの所で一二日、バーナント・コーネルの所で五〇日大工仕事をして働いた。他の人のためにも大工として働くことが多かった。一八三六年一二月に結婚し、父から家を借り、初めて自分で農業生産をおこなう。三七、三八年には収穫期に労働者を雇い、小麦、亜麻、バタなどを売却している。

当時のロットは多芸多才ではあったが、何でも屋というわけではない。鍛冶屋、靴屋、織工、仕立屋、医者などは当然頼まねばならなかったし、農産物以外はデモット、エリソン、メイプス等の店で買わねばならなかった。中でも、デモットの店にはしばしば出かけた様子で、月に一、二度は必ず行っている。デモットの店での買物の総額は年に五〇ドル程度であり、掛けて購入した。清算は年一回であるが、ロットは農産物をやはり掛けてデモットに売却していたので、その清算も現金ではなく手形でおこなわれた。ロットが購入した商品の内容は、コーヒー、紅茶、砂糖、糖蜜、香料、タバコ等の食料品と、モスリン、キャリコ、ギンガム、フランネル、絹などの生地類や雑貨であった。エリソンの店は金物の品揃えが良かったのか、ロットが家庭を持った際には、

フィリップ・ロットの世界

そこで鍋釜の類や、水差し、コーヒーや小麦粉を入れる容器、バケツ、洗濯桶、暖炉用具等を買っている。ブランドー、ウィスキー、ラムなどを買うのは、エドマンド・ポールドウインの店であった。

この時期のロットの元帖には、氏名と共に住所も記されている。それによると、前記八一名中、ロダイ以外に住んでいるのは八名のみであり、その内七名は隣村の住民であった。したがって、ロットの取引相手は、ほぼ同じ村の人々ということが出来る。もっとも、親しさの度合いを取引回数によって見ると、かなりの濃淡がある。一八三〇年代を通じて、五一名は一〇年間に四回以下、一三名が五回から九回、一七名が一〇回以上となっている。この一七名が、ロットの生活に最も深く関わっていたわけであり、彼等は各種の役割りを果していた。J・デグロー、A・ミラー、W・ブース、P・ヤングはロットを農場労働者として雇った。U・ハウエル、B・コーネル、J・ヴォーンは、農業以外の仕事にロットを雇った。一方、J・オグデン、L・ミラーはロットの農場を手伝い、A・ヴェセリウス、W・ヴァンリユー、J・ヴァンホーン、J・ギャロプは鍛冶屋、靴工であった。J・デモット、M・エリソンは前述の如くロットが取引した商人であり、J・ヴェセリウスは皮革、馬具などを扱っていた。

若いロットを取りまいていたのは、こうした人々の世界であったが、西漸運動や都市化の波は彼の住む村へも押し寄せており、ロダイの人口は流動的であった。一八三〇年と一八四〇年の国勢調査表は世帯主の氏名しか記録していないが、それからも人口の

流動性を推測することはできる。一八三〇年、ロダイの世帯数は三〇三であり、四〇年には四二七に増加していたが、一〇年前から住んでいたのは一二二に過ぎなかった。この数は世帯主氏名によるものであり、死亡率については解らないので、正確な移動率は不明だが、ともあれ、ロダイが静止した村でなかったことは確かである。そのことは、ロットの取引相手についても言えるのであり、前記八一名中、一八四〇年代にも勘定帖に顔を出しているのは三〇名に過ぎない。

二

一八四〇年代、ロットの生活は三〇年代とはかなり異なる様相を示した。彼は農場主であり、三人の子供の父親でもあった。帖簿に記入された人名は一三七、そのうち一〇七名が新しい取引相手であった。第二表は、いわば彼の生涯を一度に見渡せるような形で作ってあるが、とりあえず三〇年代から四〇年代への変化に注目したい。彼の活動の幅が次第に狭まり、農場経営に収斂してゆく様子が見てとれるであろう。四〇年代の初期には、まだ時折、大工仕事をしていたが、次第に自分の農場が生活の中心になってくる。労働の交換という形で隣人のため労力を提供することはあるが、農業労働者として働くことはなくなった。そして、収入の大部分は農産物の売却によりもたらされるようになる。

後に示すように、農産物のうち最も重要な地位をしめる小麦は村の商人に売却された。その他の産物、バタ、ミルク、乾し草、とうもろこし、じゃがいも、牛肉、豚肉などの買手はさまざままで

第2表 ロット の 取 引 相 手 (1830-1880年代)

取引のタイプ	人 数					
	1830 (年代)	1840	1850	1860	1870	1880
(A) ロットが販売						
A1 農業労働	16	0	1	0	0	0
A2 非農業労働	13	12	0	0	0	0
A3 農産物	3	24	47	57	48	25
A4 非農業製品	1	0	1	0	0	0
A5 その他	5	2	3	3	0	0
(B) ロットが購入						
B1 農業労働	14	48	43	33	39	9
B2 非農業労働	16	38	30	19	19	2
B3 農産物	1	0	3	3	3	2
B4 非農業製品	12	13	12	8	4	2
B5 その他	0	0	0	0	0	0
合 計	81	137	140	123	113	40
その内新参者数	(81)	(107)	(86)	(75)	(81)	(17)

二四名存在した。鍛冶屋、靴屋、医者などが、代金を農産物で受取ることもあった。五九エーカーの農場のため、四〇年代には計四八名の労働者を雇っているが、年雇いの者はなく、いずれも農繁期に数日ずつ雇うのみである。例えば一八四五年の場合、計一二名が働いているが、期間は二、三日ずつである。賃金は一日七五セントから一ドルであった。農業以外の仕事をロットのためにする人々のうち、一番大切なのは鍛冶屋であつたろう。馬蹄をつくり、蹄鉄を打ち、農具をつくり、修理もした。犁の刃、乾し草作りに用いる鉄の熊手、鍬などから、ドアの金具や鉄の部分、ポンプ用の鉄などを供給し、修理したし、馬車、馬具の修理も引き受けた。ロットは月に二、三回は鍛冶屋を訪れている。もともと、一軒のみをひいきにしたのではなく、何軒かに仕事を頼んだ。その中ではJ・ヴァンホーンとG・サージェントが気に入っていたらしい。

水車場は、ロダイを流れるミル・クリーク (Mill Creek) 沿いにいくつもあつた。ロットはJ・アッターに松、樫、くるみ材の製材を頼んだ。桶屋のP・ニールからは、バタ用の小桶、りんごサイダー用の樽、井戸バケツなどを買ひ、一つ四セントで桶のたがをはめてもらった。靴工、織屋、糸繰り、仕立屋なども、ロットの家族にとっては親しい存在だつた。彼の妻と子供は、毎年一足ずつ新しい靴をつくってもらえたが、靴底のとりかえや修理などもかなり必要であつた。J・ギャロプ、E・ダーリング、W・クロス、M・デイル、J・ハウスは、いずれもロット家の出入りの靴屋だつた。家族にとって、医者も大切で、L・ポストは年

何回か往診に来てくれた。ロット本人は健康そのものであつたらしいが、息子が腕に怪我をしたり、妻が病氣になつたりした。また、J・イーストマンも何度か往診している。女中のことも忘れてはならない。とくに豊かではなくとも、中流以上で小さな子供のある家庭には女中のいることが多かった。ロットの家でも、とくに農繁期で労働者の食事などをつくる必要のある時期には、若い女子の手助けを借りた。女中の多くは、同じ村の労働者の娘だつた。一八四三年にロットの家で働いたローダ・ジョンソンはロダイの労働者アダム・ジョンソンの娘だつたし、彼女の姉のシンシアは、ロットの家で糸つむぎを手伝つた。彼女達の賃金は週七五セントから一ドルであつたが、村の商店での彼女等の買物の付けをロットが支払うということもあつた。

ロットと取引のある商人の中で、デモットとエリソンとは三〇年代からの知合いであつた。A・ウドワース、M・インガソル、W・ヒムロッドは新顔であつたが、ウドワースは一八三八年から四〇年にかけてデモットの店のパートナーだつた。ロットは特定の商人とのみ取り引きしたわけではなかつたが、農場を購入する際、デモットから一、二〇〇ドルを借りたという事情もあつて、デモットとの関係が一番密接であつた。なお、デモットは商店を経営するかたわら、土地売買や抵当金融も盛んにおこなつており、このことは郡の役場の登記簿を見ればすぐに解る。ロットが借金をして農場を買つたのが一八四一年であり、当初の契約では四四年までに返済する筈であつたが、実際には四九年までかかつて皆済した。多分、その見返りとして、ロットは日用品の大半を

第3表 取引の継続期間

取引の 継続年数	取引開始の年代						合計
	1830	1840	1850	1860	1870	1880	
(年数)	(人 数)						
1	30	39	43	33	39	14	198 (44.3%)
2 — 5	17	32	24	21	25	3	122 (27.3%)
6 — 9	10	10	6	9	14	0	49 (10.9%)
10 — 19	6	15	10	11	3	0	45 (10.9%)
20 +	18	11	3	1	0	0	33 (7.4%)
合計	81	107	86	75	81	17	447(100.0%)

デモットの店で買い、主たる作物をデモットに引渡した。毎年、一〇月半ば頃、ロットは二五〇から三〇〇ブツシエル程度の小麦をデモットの店に運び、一部は現金で支払いを受けたが、大部分は借金返済および掛買いの清算にあてた。小麦代金が四〇〇ドル位でも、ロットの手に入るのは一〇〇ドル以下であった。もっとも、こうした関係は、どちらかといえば特殊であった。ロットの取引相手を見ると、常に同じ業種、職種の者が複数含まれていたのであって、誰か一人が取引を独占しているというのではない。ロットには、鍛

冶屋の場合であれ靴屋の場合であれ、選択の自由があったのであり、辺鄙な農村であっても独占よりは競争が原則であったように思われる。

ところで、一八三〇年代のロットに一七名の親しい取引相手があったことを記したが、四〇年代に入って、一〇回以上の取引をした相手の数は四三名であった。内、七名はロットから農産物を購入、一三名は農業以外のサービスを提供、九名は工業製品等を供給した人々である。農業労働者と女中の場合には、何回も繰り返し働いた人々を選ぶことにしたが、三年以上の年度にわたって働いた労働者は九名、女中は二名であった。

第二表に示した如く、一八五〇年代以降のロットの生活は、農場経営者としての落着きを見せている。彼は農産物を売却し、農業労働者、手工業者、商人などからサービスを提供されるというパターンである。とはいえ、彼を取り巻く世界の変化は激しく、このことは新しい取引相手の数から知ることができよう。一番最後の二八八〇年代を別とすれば、どの年代をとっても、取引相手の六割以上は新顔であった。但し、これは長い付き合いの者がいないという意味ではない。彼と取引のあった四四七名を、取引の継続期間によって分類した第三表を見れば、その点が明らかになるであろう。

最初に気付くことは、長年の付き合いは若い頃に生まれる、といういわば当然の事実である。ロットと二〇年以上にわたって取引関係があった者は三三名である。彼は一八八〇年代末まで生きていたのであるが、この三三名中、一八五〇年以後に取引を始め

た者は四名にすぎない。次に、どんな取引の相手が長期にわたる関係を有するか、という点であるが、これははっきりしない。長年の間に特定の個人の果す役割が変化する場合もあるし、最初の取引のみに限っても、特定の業種が目立つということはない。三名中、八名はロットを労働者として雇い、六名はロットから農産物を購入した。労働者や職人は通常移動率が高いが、上記三名中には、農業労働者八名と職人六名が含まれている。そして残り五名は商人であった。逆に考えれば、農村経済のどの分野にも、長年の知り合いが存在したという事実こそが、ロットの生活にあって好都合であったということができるだろう。ロットの経済的小宇宙の住民は頻繁に入れ替っていたが、彼の日常生活は若い頃からの顔馴染みの間で営まれていたのである。

三

フィリップ・ロットの世界で最も重要な人物は誰であったろうか。彼の父親を別とすれば、一八三〇、四〇年代においては、多分ジョン・デモットがそうであったろう。デモットは農産物の主要な買手であり、消費物資の主たる供給者であった。しかし、一八五〇年代に入ると変化が生ずる。デモットは舞台の奥に退き、新たな登場人物が前面に出てくる。それにつれて、取引の方法にも変化が生ずるのであるが、これは生産および流通面でのより大きな変化の反映でもあった。

ロットの勘定帖によると、一八五三年以降、デモットに替わって、オーガスタス・ウドワースが農産物の主たる買手、食品・雑

フィリップ・ロットの世界

貨・衣料の主な供給者となる。取引の大半は依然、掛けで行なわれているが、ロットが農場の生産物を売却した際には現金を受取っている。数年たため内に、ウドワースはバタとクローパーの種子を除いては主たる買手ではなくなり、穀類はH・サンドフォード、あるいはP・ヒムロッドが購入するようになる。サンドフォードの場合には衣料や雑貨の販売も行なっているが、ヒムロッドは穀類の購入のみである。一八五八年には、D・ケイスとJ・スワルソートが新たな農産物購入者として登場し、それに次いで一八六一年、J・コリエルが顔を出し始める。なお、ケイスとスワルソートはロットの義理の兄弟であるので、親族関係が取引に何らかの役割を果たしたとも考えられるが、他の商人が排除されてしまったわけではない。ロットとの取引で見ると、これら新顔の商人は、農産物の購入が専門であって、消費物資の販売はしていない。ロットが日用品を購入するのは、ウドワースの店か、金物商のS・ルートの店であった。

以上に述べた状態は、ロットの住む地域における「何でも屋」的な商店 (general store) の機能の変化と、新しい種類の商人の登場を示している。デモットは正に「何でも屋」であって、各種商品の売却をすると共に、農産物を集荷して都市市場へ送り出した。農民に対して掛けて商品を売り、収穫期に農産物を引取って清算したのである。このように、一種の物々交換が一般的であり、農産物集荷を専門とする商人がいない内は、村の商人は販売と集荷の二重の機能を果たす必要があった。かかる方式には危険もあったに違いないが、その地域の主要農作物が生産・販売の両面

で安定している場合には、商人にも農民にも都合であったと思われる。ロダイ周辺においては、一八四〇年代末に至るまで、小麦がそうした作物であった。隣り村のオーヴィド(Ovid)から、一八五一年、合衆国特許局(農務省の前身)に寄せられた報告によれば「この地域の主たる作物は小麦である。……小麦やその他の作物の収穫量は増加しており、その傾向が続くであろう」と述べられている。

右の如き楽観的予想にもかかわらず、小麦生産の最盛期は過ぎ去りつつあった。ロダイにおける小麦生産高は、一八五〇年には七六、八二七ブッシェル(農家あたり三九二ブッシェル)であったのが、一八六〇年には三〇、七四八ブッシェル(一六二ブッシェル)へと減少している。ロットの農場においても、一八五〇年代初めまでは、小麦が常に最も重要な作物であり、収入の半分以上をしめていたが、中葉以降は大麥、オート麦、クローバーなどが収入面から見て主位をしめる場合が多くなった。六〇年代に入つて小麦が優位をとり戻した年もあったが、全般的にいえば、ほぼ一八五〇年前後に小麦の時代は終わったのである。何でも屋デモットの後退と、専門的商人の登場は、それと歩調を合わせていた。⁽¹⁰⁾

新たな傾向として、現金取引が次第に多くなってきた点も注目すべきであろう。一八六〇年までには、ロットと農産物商人との取引は、すべて現金となった。同時に、日常必需品の購入に際しても、掛けよりは現金払いが増大した。一八五〇年についてみると年間の日用品購入額一七四ドルの内、現金払いはまだ四八ドル

(二七・六%)にすぎない。それが一八六〇年になると、三二六ドルの内、二〇八ドル(六三・八%)が現金で支払われている。現金取引の増加は、ロットとロダイの商人との結び付きを、いく分緩めた様子である。ロットは相変らずロダイのウドワースの店で買物をすますることが多かったが、時として近くのもう少し大きな町へ買物に出掛けている。

例えば、一八五八年六月、ロットはウォータールーへ行つて、上着とチョッキと帽子を自分と息子のために購入している。同年一月には、息子に一寸値の張る外出用の上着をジュネーバ(Geneva)で買った。ジュネーバはセネカ湖を船で渡ったところにある隣りの郡の町である。「ジュネーバで雑貨と衣料品を購入」という類の記入が増え、食料品を買ってくることもあった。もちろん、こうした買物は、ロットの子供達が成長した結果と考えることもできよう。一八六〇年に、長男は二一才、次男は一八才、娘は一四才になっていた。新しい世代の若者は、ロダイの商店の品物では不満足であったかもしれない。とはいえ、取引範囲の拡大は消費物資の購入にとどまらなかった。何人もの農産物商人が存在したので、ロットは有利な売却をすることができた。彼は一八五七年にはサンドフォードに売った大麥を、翌年はヒムロッドに引渡している。その年、ライ麦とクローバーの種子はサンドフォードに、小麦とオート麦はケイスに売却している。

すでに記した如く、ロットは一八五〇年代に経営を拡大し、農場価値を増すことができたが、この十年間はロダイの農民にとつて困難な時期であったに相違ない。一八五〇年の国勢調査には二

○一名の農民が記録されているが、一八六〇年にも存続しているのは、その内一〇六名であった。これら一〇六名中、四六名は農場面積を拡大し、三六名は同じ面積を維持したが、二四名は農場を縮小している。右の一〇六農民の小麦生産高は、一八五〇年には平均四二〇ブッシェルであったが、十年後には一七八ブッシェルに減少した。その代り、とうもろこし、オート麦、大麦、蕎麦などの生産は倍増しており、小麦中心の農業からの転換が計られたことが見てとれる。ロットは、こうした時期を乗り切ることのできた農民の一人であった。⁽¹¹⁾

ロダイの人口全体も、一八五〇年から六〇年にかけて、二、二六九から二、〇六七へと減っているので、多くの者にとって、五〇年代は将来に見通しの立たぬ暗い時代だったようにも思える。とはいえ、この村に残っていた人々に、経済的上昇の機会がなかったかといえ、そうではない。ロダイに、この十年間住み続けたいたのは二一四家族(世帯)であった。一八五〇年の家長の職業と六〇年のそれとを比較してみると、そのほとんど(八一・三%)には変化がないが、三一家族(一四・五%)は労働者から農民へという具合に上昇しており、残り僅か(四・二%)が没落した。また、一八五〇年には四七名の家長(二二・〇%)が無産者であったが、六〇年には、それが二八名(一三・一%)に減少している。他方、三、〇〇〇ドル以上の財産所有者は八六名(四〇・一%)から一〇五名(四九・〇%)に増大している。さらに、一八六〇年には、二一六の新しい家族(五〇年には存在しなかったもの)がロダイに加わっているが、二一六名の家長の内、七一

名は他からの移入者ではない。彼等は一八五〇年には農民の息子などとして村内に住んでいたものであり、いわば新しい世代の家族が村に育ってきていることを示している。困難な時期とはいえ、⁽¹²⁾独立あるいは上昇の機会が存在していたことを記憶しておきたい。

一八六〇年頃までには、さまざまな変化も一応終り、ロットは農場経営についての彼の能力に自信を持って進んで行くことができた。しかも、六〇年代は好況期であって、ロットは南北戦争による好景気の利益を享受した。彼の農場からの年間収入は、五〇年代には一八五八年を除いては一、〇〇〇ドルを越えたことはなかったが、六〇年代には平均で約一、三〇〇ドル、一八六四年には一、八〇〇ドルを越えた。穀物価格は五〇年代の倍近くまで上昇したが、ロットは畜産からの所得をも増大させた。六〇年代中葉には、クリスマス近くになると、七面鳥や鶏を、特急料金を払って直接ニュー・ヨーク市に出荷しているし、戦争で値上りした羊毛生産にも力を入れて、経営の才を示している。すべての取引をデモットに頼っていた頃とは大違いである。ロット一家の豊かさは、妻や娘のためにメロデオン(オルガンに似た楽器)やミシン(当時の新製品)を購入したことも表わされているし、一八六六年に三二エーカーの農地を取得したことも見られるであろう。

先に第二表に示した如く、ロットと取引をした者の数は一八五〇年代の一四〇から一八六〇年代には一二三に減少している。しかし、その内でロットから農産物を購入した者(A3)の数は四

七から五七へ増加しており、かかる傾向はずっと続いていた。農産物購入者がしめる割合は、一八四〇年代には一七・五%であったのが、五〇年代には三三・六%、六〇年代には四六・三%になっている。他方、ロットに農業労働を提供する者(B1)の割合は減少傾向にあり、四〇年代には三五・〇%、五〇年代には三〇・七%、六〇年代には二六・八%となった。ロットは、より狭い範囲内で労働者を雇用し、より広く農産物を売却するようになって云えるであろう。

もちろん、ロットと取引相手との関係が、親密さという点でさまざまであったことは、すでに述べた通りである。一八六〇年代にロットから農産物を購入した五七名の内にも、重要な者とそうでない者とがいる。例えば一八六四年、農産物売却収入は一、八二三ドルであったが、その内の約七五%は四名の者に売却されたものであった。小麦、大麦などは穀物商人のコーエル・チャップマン、G・スワルソート、製粉業者のE・ハウエルへ、羊と羊毛はラプリーへ主に売却され、残りの雑穀類、バタ、麦藁などは小口購入者へ売られたのである。なお、麦藁の買手は、駅馬車屋と旅館の主人であった。農業労働の場合にも事情は同様であり、一八五八年からロット農場で働くようになったJ・ラーシイが六〇年代のほとんどを通じて雇われている。ロットが狭い範囲から労働者を雇うようになったのは、安定した供給を受けられるからでもあった。一八六一年に収穫機を購入したことも、刈取りに必要な人手を減らした。

さらに、ロットの息子達が成人になったことも、ロット農場の

労働者雇用を減少させた。彼等は徴兵を免れたので、南北戦争中でも働き手がいたわけである。子供が成長したお蔭で女中を置く必要はなくなり、ロット家には一八七六年に彼の妻が死去するまで、女中は雇われていない。その結果、六〇年代には非農業労働の供給者(B2)が減少したのである。また、仕立屋、革なめし屋、靴造りに関する記入が次第に減少したことは、別の意味で注目すべきであろう。しかし、既製服や、工場製の靴が一般的になってくる六〇年代以降、村の鍛冶屋だけは健在であった。七〇年代に入っても、「馬に蹄鉄をつける」「馬鍬の手入れ」「馬車の修理」といった記入はロットの勘定帖に多く見られ、その内容は一八三〇年代として変わらない。工業化の歩みはゆっくりと進んだのであって、農村の生活は急激には変化しなかったといえよう。

四

ロットの世界の地理的境界には変化が生じたであろうか。一八五〇年代以降においても取引相手は主にロダイの人々であったか。また、彼等の職業は何であったろうか。こうした問いには、国勢調査表がある程度の答えを与えてくれる。ロットの勘定帖に出てくる人々のかなりは、ロダイの人口調査表にも記載されており、それらの数と職業を示したのが第四表である。

ロダイの人口調査表に氏名のない者はすべて村外の住民であると考へてはならない。例えば、一八四〇、五〇年代のロットの勘定帖には計二二三名がのっており、その内、一八五〇年の人口調査に含まれているのは一二〇名である。しかし残り一〇三名は外

第4表 取引相手（ロダイ住民）の職業

職 業	1850年	1860年	1870年	1880年
農 民	46	45	39	31
勞 働 者	36	27	20	17
手 工 業	25	27	22	15
商 自 由 職	5	5	12	5
無 業 職	4	4	4	2
	4	2	3	4
合 計	120	110	100	74
取引相手総数	(123)	(123)	(110)	(76)

部の人間であり、ロットの世界が地域的にも拡大したと考えることは正しくない。しばしば触れてきたような人口の流動性を考慮すれば、この一〇三名の内には四〇年代もしくは五〇年代のどこかの時点でロダイの住民でありながら、一八五〇年の調査時点（七月から八月にかけて行なわれた）には村内に居住していなかった者も多かったに相違ない。かかる点を配慮して、国勢調査の年度をまたいで

ロットと取引をした人々のみをとり上げ、ロダイの住民であったか否かを検討した。すなわち、一八五〇年調査であれば、ロットとの取引が四〇年代で終了してしまつた者、五一年以降に初めて取引を開始した者の両者を除いて、居住の有無を調べたのである。五〇年調査の場合、残つたのは一二三名であつて、結局、取引相手のほとんど全員がロダイの住民であることが解つた。第四

フィリップ・ロットの世界

表の取引相手総数というものは、そのようにして残つた者の総数である。

第四表が示している如く、一八五〇年から一八八〇年にいたる四回の調査時点において、ロットの取引相手の九割以上は常にロダイの住民であつた。ロットの経済的世界は、まさに彼の住んでいた村なのであり、このことは彼の活動の振幅が増した時期においても、あまり変化しなかつた。ロットの世界は、地理的な意味で、狭い世界であつたことに間違いない。しかし、この「狭さ」を、時代から取り残されていた証拠であるとか、衰退の表われとか理解すべきではない。むしろそれは、急速に変化しつつある時代の中で、ニュー・ヨーク州の一農村が持つていた活力のしるしであつた。それぞれの時期に、ロットの世界をつくり上げていたのは、一〇〇人前後の農村の人々であつたが、その中で、ロットは独立し、農場を経営し、生産や販売に新機軸を取り入れていった。彼の住む世界が変化に対応する柔軟さや活力を失つていたら、そのようなことは不可能であつたに違いない。

さて、ロットの取引相手の職業は何であつたか。そのおおまかな分類を第四表に示したが、個々の取引相手の変化にもかかわらず、職業的分布はあまり変らなかつたことが解る。農民が大体四〇%、労働者と手工業者がそれぞれ二〇乃至二五%、商人と医師等が各四%前後、残りは未亡人等職業を持たぬ者となっている。一八五〇年に労働者が多いのは、同じ人間を続けて雇えなかつたことよろうし、一八七〇年に商人が多いのは、前記の販売活動の変化によるものであろう。

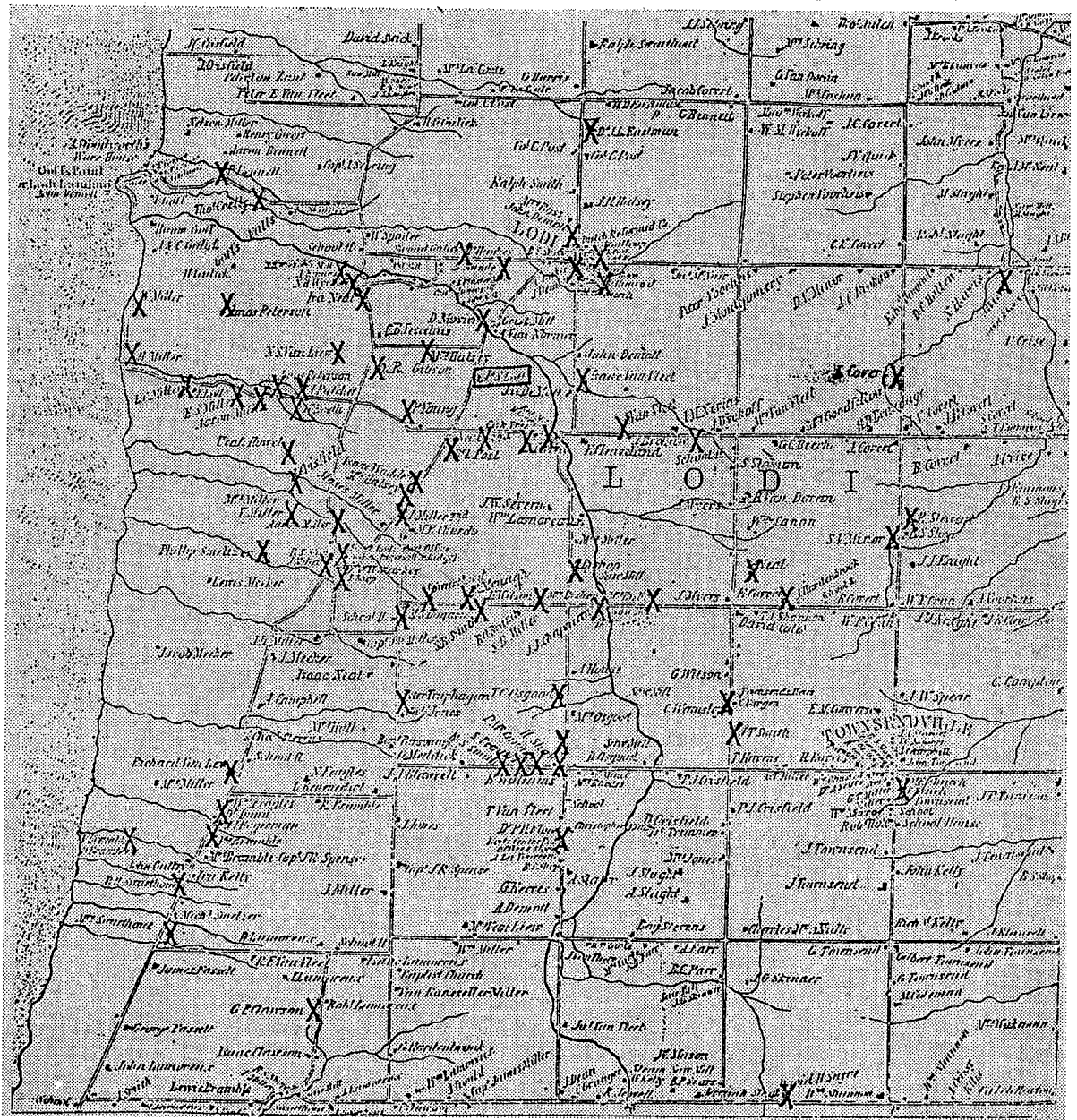
ところで、農民は如何なる機能を果したのか。労働の交換や共同作業ということであろうか。一八四〇年代には、近隣の農民と労働の交換をした記入があるが、五〇年以降はそれは少なくなる。勘定帖から見る限り、農民には脱穀を請負っている者が多いのであり、そうした農民は脱穀機を取得して賃仕事を行なっていた様子である。また農民は家畜や種子の購入者でもあった。前年の作柄が思わしくない時など、農民は別の品種を入手して試みたのであろう。ロットが他の農民から、馬や牛の種付けをしてもらっているのは、品種改良への意欲を示している。一八七〇年代に入ると、ロットは他の農民と共に、チーズ共同製造に参加し、夏期に牛乳を提供した。一八七五年の例をあげれば、彼は六頭の乳牛から一一、八五四ポンドのミルクを提供し、現金配当一一三ドルとチーズ六八ポンドを手に入れている。

ロダイの農民の中には、ロットと特に親しい者もいた。ジョセフ・スワルソートとの取引は一八四三年から一八八四年まで続いているが、彼はロットの妹の夫である。ジェイコブ・デグローとの取引も三〇年代から六〇年代に及んでいるが、彼は妻の側の親類であった。ハーモン・ハルシーとの取引も一八四一年から一八八一年まで続くが、彼の場合にはロット農場の隣りの農場を持っており、やはり長い付き合いのジョン・ニールも隣り合せの農場所有者であった。エライシャ・ミーナウとの取引も多いが、彼はスワルソートの隣人であった。家族関係と近隣関係とが、ロダイの農民同志を結ぶ絆であったのであろう。

実際、近くに住んでいるということが、ロットと他の人々を結

び付ける上で大きな役割を果たした。ロットの取引相手の大半がロダイの住民であることは述べたが、逆に、ロットがすべてのロダイの住民と取引をしたわけではない。例えば、ロダイの総家族数は、一八五〇年には四二七、一八六〇年には四二八であったし、職業従事者数は六七四名および六八二名であった。したがって、ロットの世界を形成していたのは、ロダイの村人の四分の一から六分の一にすぎないことになる。そこで、ロットの取引相手は、何らかの特徴を持つグループであったか否かが問題となる。この点をロットが最も活動的な年代であった一八五〇年と一八六〇年について検討してみた。¹⁴⁾

ロダイの住民全体の中で、ロットと取引関係を結んだ人々は、如何なる特色を有していたか。職業的分布、住民としての定着度、財産所有額、出生地などの観点から、これを見た結果、ロットの取引相手が特別なグループであるという証拠を見出すことは困難であった。住民全体と比べると、ロットの仲間達には農民、手工業者の割合が幾分多く、長くロダイに住んでいる者、土地所有者の割合が多かった。但し、財産所有額は、全体としての平均とさして差はない。なお、ロットの取引相手のみについて、財産額を見ると、その平均が一八五〇年から一八六〇年にかけて減少している。村全体の数字はこの十年間にあまり変化していないし、ロット自身のそれは上昇している。一見奇妙な感じがするが、これは別に不思議ではない。一八五〇年のグループには、ロットが労働者や大工として雇われた富裕な農民などが含まれているが、一八六〇年のグループには、ロットに雇われた側の人々



第1図 ロダ島の地図(1852年)
 □印 ロットの家 ×印 ロットの取引相手

が多く入っているからである。経済的な取引相手ではなく、社会的な仲間であれば、ロット自身が豊かになるにつれ、仲間も上層の人々が多くなったことであろう。しかし、経済的な場合には、むしろ逆な事態が見られるのである。

ロットの父親がニュー・ジャージー州から移住してきたことは最初に記した。ロダ島の住民の六五%（一八五〇年）から六九%（一八六〇年）はニュー・ヨーク州生まれであったが、ニュー・ジャージー州生まれの者も一九%、一五%と減少しつつはあったが多かった。とはいえ、ロットの取引相手に、とくにニュー・ジャージー生まれの者が目立ったとは云えない。結局のところ、際立った特色と云うべきものは見当らないのであ

る。ところが、住居の位置と云う点で、少々奇妙な状況が見出された。

国勢調査表においては、家屋(世帯)に、調査員が訪問した順に番号がふられている。一八五〇年を例にとって、ロットの取引相手の番号を調べてみると次の如くである。先ず一番から一五〇番までの間に、ロットの仲間は六〇名存在する。しかし、一五一番から三〇〇番までの間には一〇名しかおらず、三〇一番以降はまた数が増す。因にロットの家番号は六三番、彼の父親の家は五四番である。したがって、ロットの取引相手は、ロダイの中でも、特に家の近い者同志がかたまっていたように思われる。このことを確認するため、一八五二年のロダイの地図(家屋所有者の氏名が記されているもの)で、ロットの取引相手の家に×印を付してみた。第一図がそれである。

この図によって明らかな如く、ロットと取引をした者は、村の北西部、とくにミル・クリークと呼ばれた川の西側に集まっていることが解る。ロットの家は□でかこつてあるが、川の西側の道路沿いにある。この川は、前にも書いたが名前からも察せられる通り、水車場がいくつもあり、数ヶ所の滝がある。そしてロダイの村は、ミル・クリークによって、地形的には大きく二分されている。結局、ロットの世界の境界は、地理的要因によって支配されるところが大きく、半径五キロ程度の輪の中にほぼ納まる広さであった。

かかる「狭い世界」は、広大な西部の土地に、あるいは勃興しつつある東部の大都市に憧れる者にとっては、魅力に乏しかった

であろう。しかし、当時のニュー・ヨーク州の農村が退屈で活気のない場所であり、やる気のある者は皆出ていってしまうような所であったと考えるべきではない。ロットは農場経営者として、十分な知力と商売の勘を備えていたし、五〇年以上にわたる行跡は、彼が世の中の動きに取り残されていなかったことを示している。ただ彼は都会のごみごみした忙しい生活や、カリフォルニアの金発見の噂にはひかれず、隣人との人間的接触の機会に恵まれた農村の暮しを好んでいたに違いない。ロダイは、どんどん発展するという場所ではなかったが、環境の変化に應じて村の経済を変化させる適応力と柔軟さは有していた。なによりも、顔見知りの中で一応満足すべき所得を得、とくに不自由のない生活を楽しむことができた。ロットは晩年になって数年間ポケット日記をつけていたが、一八八四年一月三一日に、こう記している。「大分、身体が弱った感じで、日に日に弱ってゆくようだ。しかし、とくに苦情をいうべきことはない。⁽¹⁵⁾」多分、フィリップ・ロットは、特に苦情をいうことのない、一九世紀アメリカ東部の一寒村の生活に満足していたに違いない。そして、それはロットと親しい取引相手にとっても、同じであつたらう。

以上に記した農村社会の状態は、ドラマティックな新事実の発見ではないし、どの程度一般化できるものなのかも解らない。しかし、普通の人々の日常生活に興味を持つ研究者にとって、東部農村社会が訪れてみるに価する場所である、というくらい主張は出来るであろう。最近、一九世紀の農民所得あるいは農業利潤を計算し、それが他分野での利潤より低いところから、離村しな

かった農民の行動を経済的に非合理的であったとする研究がある。⁽¹⁶⁾しかし、かかる指摘に対しては、次のように云えるであろう。人間は勘定帖の中でのみ生きていたものではないし、たとえ勘定帖の中だけに生きていたように見えても、実際には人間のつながりの中で生きていたのだと。フィリップ・ロットの勘定帖は、それを証明してくれているように思われる。

註

- (1) 本稿の史料は下記のものを採る。Philip Slout Lott Papers. (Day Book, 1830-1888, 8 vols.; Ledger, 5 vols.), Dept. of Manuscripts and University Archives, Cornell University.
 - (2) 最近の地域史研究については、次を見よ。Kathleen N. Conzen, "Community Studies, Urban History, and American Local History," in Michael Kammen, ed., *The Past Before Us* (Ithaca, 1980). また、古くからの農村社会学の研究については、John H. Kolb, *Emerging Rural Communities* (Madison, 1959).
 - (3) 当時のニュー・ヨーク農村については、下記を参照されたい。岡田泰男「一農民の日記より見たるニュー・ヨーク農業の変遷」、『三田学会雑誌』六四卷八号、一九七一年)、同「ニュー・ヨークからアイオワへ——ある農民の西部移住——」(上・下)、『三田学会雑誌』六七卷七・八号、一九七四年)、同「西漸運動と東部農村——ニュー・ヨーク州の場合」、『三田学会雑誌』七三卷三号、一九八〇年)。
 - (4) センサスは下記のものを使用した。U. S. Census, フィリップ・ロットの世界
- (5) 本稿の主たる史料は先にあげた Lott Papers であるので、以下、特別に必要な場合以外は、帖簿についての註記をおこなわない。
 - (6) U. S. Census (MSS), Population, 1830, 1840. なお、マナカ郡の歴史は、*History of Seneca County, New York* (Philadelphia, 1876) に記されているが、以上の各書はわた人々の中には、この書物に略歴などが記されている者も少なくない。
 - (7) 女中がらる家庭は、センサスの Population Schedules によって知ることが出来る。なお、例えは上記を見よ。David E. Schob, *Hired Hands and Plowboys* (Urbana, 1975); David M. Katzman, *Seven Days A Week: Women and Domestic Service in Industrializing America* (New York, 1978).
 - (8) 当時の商人については、次のような研究がある。Carol H. Schwartz, "Retail Trade Development in New York State in the Nineteenth Century," (Ph. D. Thesis, 1963, Columbia Univ.).
 - (9) *Report of the Commissioner of Patents, Agriculture*, 1851, pp. 210, 216.
 - (10) U. S. Census (MSS), Agriculture, 1850, 1860. なお、当時の事情については次に記されている。John Del-

afeld, "A General View and Agricultural Survey of County of Seneca," N. Y. State Agric. Soc. *Transactions*, X (1850).

(11) U. S. Census (MSS), Agriculture, 1850, 1860.

(12) U. S. Census (MSS), Population, 1850, 1860.

(13) Jared van Wagenen, Jr. *The Golden Age of Home-spun* (New York, 1963) 4頁以下。

(14) 同上 U. S. Census (MSS), Population, 1850, 1860 の分析によること。

(15) P. S. Lott Papers, Diary, 1884.

(16) Fred Bateman and Jeremy Atack, "The Profitability of Northern Agriculture in 1860," *Research in Economic History*, IV (1979), 87-125.

〈付記〉 本稿は中井信彦先生の御退任にあたり、長年の御指導を感謝して書かれたものである。先生の御健康と今後の御活躍をお祈り申し上げます。